町田の地名のいわれ

1993年

町田市立図書館

町田市立図書館
2010156137
110
93

目　次

町田 …… 1

町田地区 …… 3

本町田　原町田　森野　南大谷
玉川学園　中町　旭町　東玉川学園

南地区 …… 11

金森　成瀬　高ヶ坂　鶴間　小川
つくし野　南つくし野　成瀬台　南成瀬
成瀬が丘

鶴川地区 …… 19

小野路　野津田　金井　大蔵　真光寺
広袴　能ヶ谷　三輪　鶴川　薬師台
三輪緑山

忠生地区 …… 29

山崎　木曽　図師　根岸　矢部
常盤　上・下小山田　忠生　小山田桜台

堺地区 …… 37

相原　小山

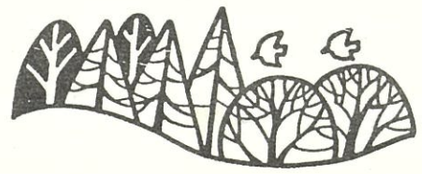
町田

はっきりしたことはわかっていませんが、次のような説があります。

・「町」は田の区画のことなので、「町田」は区画した田地のこと。町田といわれるようになったのは、今の本町田あたりから田がひらけはじめて、それがきちんと区画されるようになったから。

・むかしはマチとイチは区別のないことばだった。町田は古くから市がさかんだったので、そこから町田という名になったのではないか。

・市には「市の神」がまつられる。その祭りの費用にあてるための田を「祭り田」という。この祭り田が祭田（まちだ）になったのではないか。



町田地区

（昭和３３年（1958年）２月１日、町田町、鶴川村、忠生村、堺村が合併して東京都で９番目の市として、町田市が誕生しました。

その年の４月１日現在の人口は、61,597 人（男30,673 人、女30,924 人）世帯数は、13,001 世帯でした。）

本町田

原町田

むかしは町田村という１つの村でしたが、戦国時代のころから家の数がふえてきたので、天正１０年（１５８２年・本能寺の変で織田信長が明智光秀にほろぼされた年）に今の原町田のあたりが町田村から独立して原町田村になりました。町田村の原っぱにできたので原町田村という名前になったといわれています。のこった町田村は「本」の字を加えて本町田村と呼ぶようになりました。

森　野

・むかしから「森」または「森村」と書いてモリノムラと呼んでいたが、享保の時代（１７１６～３５年・江戸時代中ごろ）から「野」の字を入れるようになった

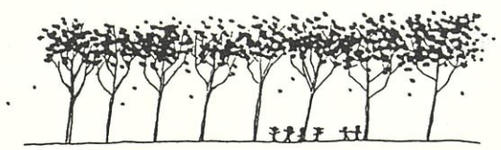
・むかしは「森」と呼ばれてきたが、木曽・本町田・原町田・森の４つの村の間に相ノ原があり、森村に近いところを森野と呼んだのが地名となったなどといわれています。

南大谷

むかしは大谷と呼んでいました。水田のある谷戸（谷のこと）のはばが、この近くでもっとも広く深いので大谷になったといわれています。八王子の大谷と区別するため、明治１１年（１８７８年）に南大谷になりました。

玉川学園

昭和４年（１９２９年）にできた玉川学園という学校の名前からきています。名前の由来は、最初の園長の小原國芳先生によると、学園ムラは多摩丘りょうにあり「小田急に乗り多摩川をわたった丘の上」といえば見当がつくこと、多摩・多摩川はむかしから土地の人々にいいつたえられた地名であること、前の土地の持ち主の多摩の人々への感謝の気持ちをこめたことなどが理由だそうです。「玉川」の字は、地名などにすでに使われており、小学生でも書きやすく明るい字であることなどから取りあげられたということです。



中　町

原町田・南大谷・本町田の一部分が昭和４０年（１９６５年）７月１日から中町になりました。町田市の中心にあるので「中町」と名づけられました。

旭　町

原町田・木曽町・本町田の一部分が昭和４１年（１９６６年）７月１日から旭町になりました。市営球場に朝日がよくあたるので「旭町」と名づけられました。

東玉川学園

玉川学園と成瀬台にはさまれた成瀬の一部が昭和５６年（１９８１年）９月６日から東玉川学園になりました。町名は地元の人の意見や住居表示整備委員会の話し合いをもとに決められました。

小字一覧

本町田

甲一号　甲二号　甲三号　甲四号　甲五号　甲六号

甲七号　甲八号　甲九号　甲十号　甲十一号　甲十二号

甲十三号　甲十四号　甲十五号　甲十六号　甲十七号

甲十八号　甲十九号　乙一号　乙二号　乙三号　乙四号

乙五号　乙六号　乙七号　乙八号　乙九号　乙十号

乙十一号　乙十二号　乙十三号　乙十四号　乙十五号

乙十六号　乙十七号　乙十八号　乙十九号　乙二十号

乙二十一号　乙二十二号

原町田

一号　二号　三号　四号　五号　六号

七号　八号　九号　十号

森野

一号　二号　三号　四号　五号　六号

七号　八号　九号　十号　十一号　十二号

十三号

南大谷

一号　二号　三号　四号　五号　六号

七号　八号　九号　十号　十一号　十二号

十三号　十四号　十五号　十六号　十七号　十八号

十九号

「小字一覧」について

字とは町や村をさらに小さくわけたよび名で、大字と小字があります。こ

こでは「角川日本地名大辞典１３　東京都」にあるものをのせました。

みなみ

南　地　区

（昭和２９年（1954年）４月１日南村は、町田町と合併して町田町になりました。）

金森（かなもり）

渋池弁天社隣地（しぶいけべんてんしゃりんち）のひまわり幼稚園敷地（ようちえんしきち）はキンドシ山といい、園主の古木武雄氏が「ここに井戸があり、井戸から金屑がでたから金森の地名の発生は、キンドシ山だろう」という説と、金堂寺のある森の意味で「キン森」に金森を当て字にして「カナ森」となったという説があります。

疑問を上げる人もおり、理由は、金森地区に「金山」の地名があるからです。金山神の信仰（しんこう）に基づくものならば、鍛治屋（かじや）関係の事実があるはずです。

また、別に原野の雑草を焼き払って作った焼き畑を「カナ」といい、神社を杜（モリ）といいます。いろいろな説があり、はっきりしません。

成瀬（なるせ）

新編武蔵風土記稿（しんぺんむさしふどきこう）（以下「風土記」という。）によると、「村名の起こりを尋（たず）ぬるに、其始を定かにせず。土人云、この村の中央にわずかなる流れあり、雨降りてまさに晴れんとする時は、川の瀬鳴りひびきてかまびすしきゆえ此名ありと。されば鳴瀬とかくべきを、いつとなく仮借（かしゃく）して成の字を用ふるぞ」と記されています。

別の説によると、武蔵七党の中で最も有力な武士団であった横山党藍原二郎太夫孝遠の孫の鳴瀬四郎太郎が居住していた地として、いつとはなしにこの地を「なるせ」と呼ぶようになったともいわれています。

高ヶ坂

「こうが」は、「コゲ」「コウゲ」（石ころが多くて水田にも畑にも開くことができない短い草の生えた土地のこと）からきているので「高ヶ坂」は芝地の坂という意味だという説があります。

鶴　間

鶴が舞っていたので、鶴舞の里という説と鶴のいる沼＜鶴沼＞の“ぬ”の字が一字ぬけて“鶴間”となったと見る説があります。

小　川

紀州の高野山には９９谷あり、柿生の王禅寺には９８谷あるが小川はそれより一つ少なくて９７谷あるとつたえられています。

そのつたえどおり小川には数多くの谷があります。それらの多くは谷戸と呼ばれています。それら谷戸谷戸のしぼれ水を集めて、村の中央を南部の馬

の瀬谷戸あたりから幅一、二間の小川となり、村の中央を南から北に流れ、下小川を経て成瀬東光寺の下で町田川（恩田川）に注いでいる。この小川の流れている村と言うので、いつの頃からともなく、小川村“小川”と呼ばれるようになりました。

つくし野

昭和４２年（1967年）１月、小川第一土地区画整理事業施行区域について、東急不動産は「日本で初めての市民参加の街づくり」の趣旨によって、街の名前を公募しました。日本全国からあつめられた96,865 通の中から、次の６審査員によって選ばれ、３月発表されたのが「つくし野」でした。

岡本太郎（画家）、磯村英一（都市社会学者）、井上靖（作家）、

石井好子（歌手）、菊竹清訓（建築家）、手塚治虫（マンガ家）

岡本太郎は『「つくし野」という名前には夢のふくらみがある。私はこの新しい街に、太陽のイメージを描く、新鮮な風と、草の匂い。』とメッセージを寄せられています。

昭和４２年（1967年）１０月、町名地番の整理について、関係官庁より原

案作成の指示を受け、区画整理地域の町名を「つくし野」と統一し、小川住民、近隣市民の了解の下に、昭和４３年（1968年）２月、町田市へ町名変更申請を行いました。町田市においては、その年の９月市議会の議決を経て決定しました。

南つくし野

昭和４６年（1971年）１１月２日、民間の組合施行による区画整理事業によりできた名称です。

成瀬台

昭和５０年（1975年）１０月２１日、民間の組合施行による区画整理事業によりできた名称です。

南成瀬

昭和５４年（1979年）６月１１日、民間の組合施行による区画整理事業によりできた名称です。

成瀬が丘

昭和６１年（1986年）１０月１０日（組合施行外）及び昭和６１年１１月

１６日（組合施行内）に区画整理を期に、地元のみなさんの意見によりできた名称です。

※　区画整理は、道路、公園、下水道施設等、総合的・一体的に整備される都市整備手法です。

小字一覧

金森

三塚　金森　西田

成瀬

東光寺　山吹　小川尻　西ノ久保　会下山　原

中村　奈良谷戸　三ッ又　鞍掛

高ケ坂

三塚　三蔵寺　大谷向　高ケ坂中村

鶴間

大ケ谷戸　辻　町谷　町谷原

小川

柳谷戸　中村　馬ノ瀬　台　深津田　下小川

辻　原

鶴川地区

昭和３３年（1958年）２月１日、鶴川村は、町田町と合併して、町田市になりました。

合併時の人口は、8092人、世帯数は、1456戸でした。

小野路

小野路という地名は、相模から多摩丘陵を越え、関戸、府中へ至る道筋、すなわち小野郷（府中市付近）への路という意味での命名であると思われます。

野津田

野津田は、「野蔦」と書かれ、ツタが多く繁茂していたことに由来するという。文明年間（1469～86年）に山ノ内、扇ケ谷の両上杉氏が戦をしたとき、この地は戦火を被ったので、土地の人々は難をのがれて近郷に散らばってしまいました。

天正２年（1574年）領主北条氏のときに、武藤半九郎という人が先に難散してしまった人々を戻し集めて、手入れがなされず草が生い茂って荒れ果ててしまった土地を、草を刈り根を除き作物をつくれるようにして、村を復活させ、地名も「野蔦」にしたが、寛文年間（1661～72年）になって「野津田」となりました。

金　井

金井の地名については、詳しい資料がなくよくわかっていません。

日本地名事典によると、一般的には、鉄分の多い井戸のある所をいいます。

近世初期には金井村と木倉村とがあり、正保の『武蔵田園簿』には、ともに福井清右衛門の知行地であった。両村が合併した時期は明確ではなく、神蔵家「記録」によると寛文年間（1661～72年）以前のこととされています。

大　蔵

鎌倉時代（1192年に源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから約150 年間）に大蔵三郎竹高という人が、居住してから地名になったといわれています。

真光寺

北と西からきた小川が村の中央で合流する辺りに、当時池があって、下流の農家の大事な農業用水源だった。それを汚させまいと「池には青竜がいる、うろこが真の光を放っている」といわれており、真光池と呼ばれていたが、平安時代（鎌倉幕府の成立する以前、約400 年の間政権の中心が京都にあった時代）の末か、鎌倉時代の初めに池のほとりに寺ができて真光寺になった

といわれています。

広　袴

南と北が高い山に囲まれ、中央を真光寺川が流れる地形が、前後が高く、左右が低いため、あたかも広い袴のようであることから、この地名にしたと伝えられています。

能ヶ谷

能ヶ谷は広い漠然とした荒野であったようで、鎌倉幕府の頃に紀州（和歌山県）田鍋郡の住人がこの地に来住し開墾したのが始めで、「荒野を開墾し平坦に直した」ということから地名を「直ヶ谷」と名付けたが、天正年間（1573～91年）に至って北条氏の直所領となった頃に「能ヶ谷」と呼ぶようになりました。

三　輪

古代の祭祀遺物が発見された地域が、杉（椙）山神社に接しており、椙山神社の笠を伏せたような山形から、大和（今の奈良県桜井市）の三輪山に似ているという説もあります。

鶴川

明治２２年（1889年）、小野路、野津田、真光寺、能ヶ谷、広袴、大蔵、金井、三輪の八村が合併して、近くを流れる鶴見川の二字をとって鶴川村が成立しました。地名もこれに由来するといわれますが、はっきりしません。

薬師台

野津田町、金井町にまたがる宅地造成が完了にあたり、宅地造成にあたった民間業者三社から住所、地番をわかりやすくしたいとの要望が市に出されました。

宅地造成の担当課である宅地造成指導室で検討、また、開発業者からの近くの薬師池にちなんだ薬師の名前の要望、地元の状況等から、薬師台他いくつかの候補名を市まちづくり協議会にはかった結果、昭和６１年（1986年）３月１日「薬師台」と決定されました。

三輪緑山

三輪土地区画整理事業の換地処分をむかえるにあたり、この事業区域内の地番整理をする必要から、町区域の設定、新町名をどうするか、決定の話しがされました。

検討する中で、住民から緑山の名の要望、また地元（組合）からは三輪の名前でなくては、さらには、ＴＢＳ緑山スタジオからは緑山の名は使用してはこまるとの話しが出されました。

そこで住民と地元の要望の中をとって三輪緑山の案が出、ＴＢＳ緑山スタジオからそれでもとの話しが出されましたが、最終決定され昭和６３年（1988年）１１月２６日「三輪緑山」の町名となりました。

小字一覧

小野路

沼城　向坂　台　沢ノ谷　万松寺谷戸　奈良ばし

馬場　宿　後　町田　新屋敷　金子田　堂谷

けそう谷　大犬久保　小谷　下堤　湯船　別所

栗ヶ沢　黒川境　長谷　中村　柳谷　細谷

池ノ谷　瓜生　土橋　石久保　大向　清田谷

堂場入　一本杉　平久保　荻久保　中尾　富士沢

池尻　一本木

野津田

並木前　関ノ上　本村　中村　松葉　綾部前

並木　丸山　田中前　袋　川島　袋上

暖沢前　峯　薬師前

金井

一号から二十六号

大蔵

五反田　下河内　八坂前　弁天前　弁天　広町

中村前　四反田　高橋　田中田　井之花　中程

東方　関山　住吉　上打越　下打越　陣所

源太ケ谷　御廓

真光寺

一号から十一号

広袴

一号から八号

能ケ谷

一号から十三号

三輪

一号から二十四号

忠生（ただお）地区

昭和３３年（1958年）２月１日、忠生村は、町田町（まちだ）と合併（がっぺい）して町田市になりました。

合併時（がっぺいじ）の人口は、9188人、世帯数は、1619戸でした。

山崎

鎌倉時代（1192年に源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから約150 年間）に横山党の一族である山崎兼光等が住んだ地とされていますが、これも小山田氏と同様その地の名をとって、山崎を氏としたことが考えられます。新編武蔵風土記稿（以下「風土記」という。）には、村の名の起こった由来はわからないとあります。

木曽

矢部八幡社の鐘の銘によると、鎌倉時代に信州（長野県）から木曽氏を名のる人がこの地にやってきて住んだことから木曽という地名が起こったと「風土記」は伝えていますが、この鐘は今、現存していません。下村栄安氏編の「木曽町の歴史」にこの木曽氏来住説がくわしく載っています。

図師

「風土記」によると、「承久（1219～22年）のころ白山権現社（今は跡だけがあります。）が壊れて修理の必要がありました。この時小山田二郎重義がこの地を領していましたので、社の僧がお願いにあがったところ、その有

様を聞いたので、僧は、その社地を絵図にして資料として提出しました。重義はこれを見て『よく画けている。見たこともない社地なのにこの図がまるで師（先生）になって教えてくれているようだ』とたいそう感心してほうびに、この画いた僧を図師の法印と呼んでたたえ、領地を寄進してその地を図師領と呼んだ」というのです。これが図師の地名のいわれになったということです。

根　岸

延享２年（1745年）に木曽村から分かれて、根岸村となりました。

この根岸という地名は、町田市の中だけでもあちこちに見えます。根岸とは、丘や台地のふもとに沿った土地のことであるとすると、この一帯もこういう地形であり、そこに人家ができ、村が発生したことから根岸という名がそのまま地名になったと考えることができます。

矢　部

「風土記」には、木曽村の一地区であるけれども、昔から別に一村があるように矢部村ととなえていると伝えています。

地名の由来は、昔からこの地に、矢を作る材料の矢篠が繁っていて、これで矢を作って生活していた人々、つまり「矢部」の人々が住んでいたところから起こったのだとされています。

常　盤

上小山田村の一地区で、永録（1558〜70年）のころには、もうこの地名が使われていたと「風土記」は伝えていますが、由来はわかりません。

小山田（上・下）

承安元年（1171年）小山田別当有重（畠山有重）が、この地（今、大泉寺のあるところ）に城を築きました。

このことから、小山田という地名がついたと思いがちです。

「武蔵名勝図会」は、この小山田という氏を採用したのはこの時からが始まりで、その「地の名を以て氏」としたと伝えていますから、すでに小山田という地名があったことになります。

「尾根道－小山田のむかし－」第二集で薄井清氏は、小山田の地名は小山田一族が住みつく前からあった名で「山裾から集めた用水で田んぼにしてい

る状態を『山田』または『小山田』と昔からそう呼んでいますから、この地の小山田という名も「こうした水田のたたずまいから生まれたのではないかと考えられます。」と、すなわち谷戸田の美しい地形がそのまま地名になったのだと述べています。

忠　生

忠生は、町田市になる以前の村の名前でした。この忠生が土地区画整理事業により昭和５３年（1978年）６月忠生１丁目～４丁目となって再登場しました。

由来は、明治２２年（1889年）に木曽、根岸、上・下小山田、山崎、図師の各村が合併して一つの村を作ることになった時、この地は、南北朝時代の武将小山田高家（？～1336年）という忠臣を生んだところであるから、これにあやかって忠生と名づけたと「忠生村誌」は伝えています。

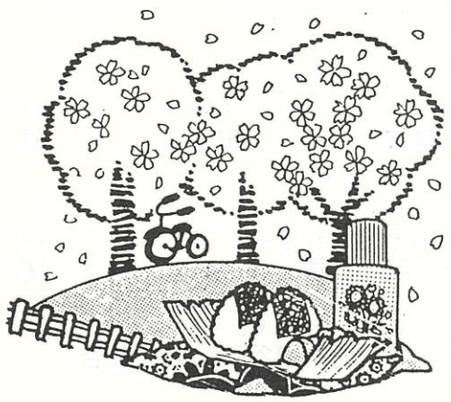
小山田桜台

昭和５４年（1979年）上・下小山田町と常盤町にまたがる丘陵を公団が開発を始め、町田市と協議を重ねて整備の後、昭和５９年（1984年）２月１日

ニュータウン小山田桜台が誕生しました。

隣接には尾根緑道が走り、町田市はここを桜の名所となるよう計画しましたので、このニュータウンも約５０種類の桜を植え、長時間に渡って桜の花を観賞できるよう工夫し、まちづくりの目玉としました。

地名は、旧町名の小山田と、この桜と、台（丘陵で平らなところ）を組み合わせて名づけました。



小字一覧

山崎

上山崎　下山崎

木曽

境川　滝ノ沢　上横町　下横町　三家　上宿

中宿　原　下矢部

図師

並木半沢　結道　岩松下谷　宿　川島　日影

坂下　日向山　馬駒　原

根岸

川端　日向根　唐沢　中村

上小山田

上常盤　下常盤　平　田中谷　下根

下小山田

大沢　龍沢　桜谷　竹内　関　堂谷

善治谷　山端　小沢谷　大久保台

堺地区

昭和３３年（1958年）２月１日、堺村は、町田町と合併して町田市になりました。

合併時の人口は、7,496人、世帯数は、1,419戸でした。

相　原

平安時代、秩父におこった武士団の流れをくむ一族が、鎌倉時代にこの地にきて勢力を張った。この武士団は、武蔵七党の一つ横山党であり、源為義に仕えたといいます。横山孝兼の長男時重は、粟飯原氏を名のり、次男孝遠は、藍原二郎太夫と称したといいます。

これが、相原というようになったとのことです。

小　山

平安末期のころ、武蔵七党の最も有力な武士団である横山党の「藍原氏」「小山氏」が町田市域に進出し鎌倉幕府の誕生に力を貸しました。

建久元年（１１９０年）１０月、源頼朝が京（現在の京都）に兵を上げたが、その中に相模小山太郎の名があり、小山有高と考えられています。

また、現在も市内小山町の片所という所に小山太郎の城址といわれる所があります。

その後の古文書にも、小山や相原の地名があり、相原とともにその土地を治めていた人名から取ったもので、だいたい鎌倉時代には、その地名がすで

にあったと思われています。

小字一覧（こあざいちらん）

相原（あいはら）

境（さかい）　境峰（さかいみね）　蚕種石（こだねいし）　坂下（さかした）　小平（こひら）　橋本（はしもと）

中ケ谷戸（なかがやと）　杉山（すぎやま）　作ケ窩（さくがあろく）　陽田（ようだ）　和田（わだ）　吉川（きっかわ）

郷路（ごうろ）　中村（なかむら）　谷戸（やと）　天沼（あまぬま）　八丹（はったん）　丸山表（まるやまおもて）

丸山（まるやま）　大糠利（おおぬかり）　梅ノ木沢（うめのきざわ）　寺谷戸（てらやと）　松ケ谷戸（まつがやと）　開都（かいと）

七国（ななくに）　真米（まごめ）　根岸（ねぎし）　川島（かわじま）　武蔵岡（むさしおか）　滝ノ谷（たきのや）

大谷（おおや）　湯ノ入（ゆのいり）　土ケ谷（つちがやと）　鍛冶谷（かじや）　秦良谷（たいらやと）　春日谷（かすがやと）

大子山（おおねやま）　大戸（おおと）　大北（おおきた）　東谷（ひがしやと）　考路（こうろ）　恋路（こいじ）

権現谷（ごんげんやと）　細豊（ほそとよ）　丑田（うした）　段木入（だんぎいり）　大地沢（おおちざわ）

小山（おやま）

馬場（ばば）　馬場山（ばばやま）　馬場谷戸（ばばやと）　中村（なかむら）　沼（ぬま）　御獄堂（みたけどう）

中村山（なかむらやま）　沼山（ぬまやま）　御獄堂山（みたけどうやま）　御獄堂谷戸（みたけどうやと）　片所（かたそ）　町有（まちあり）

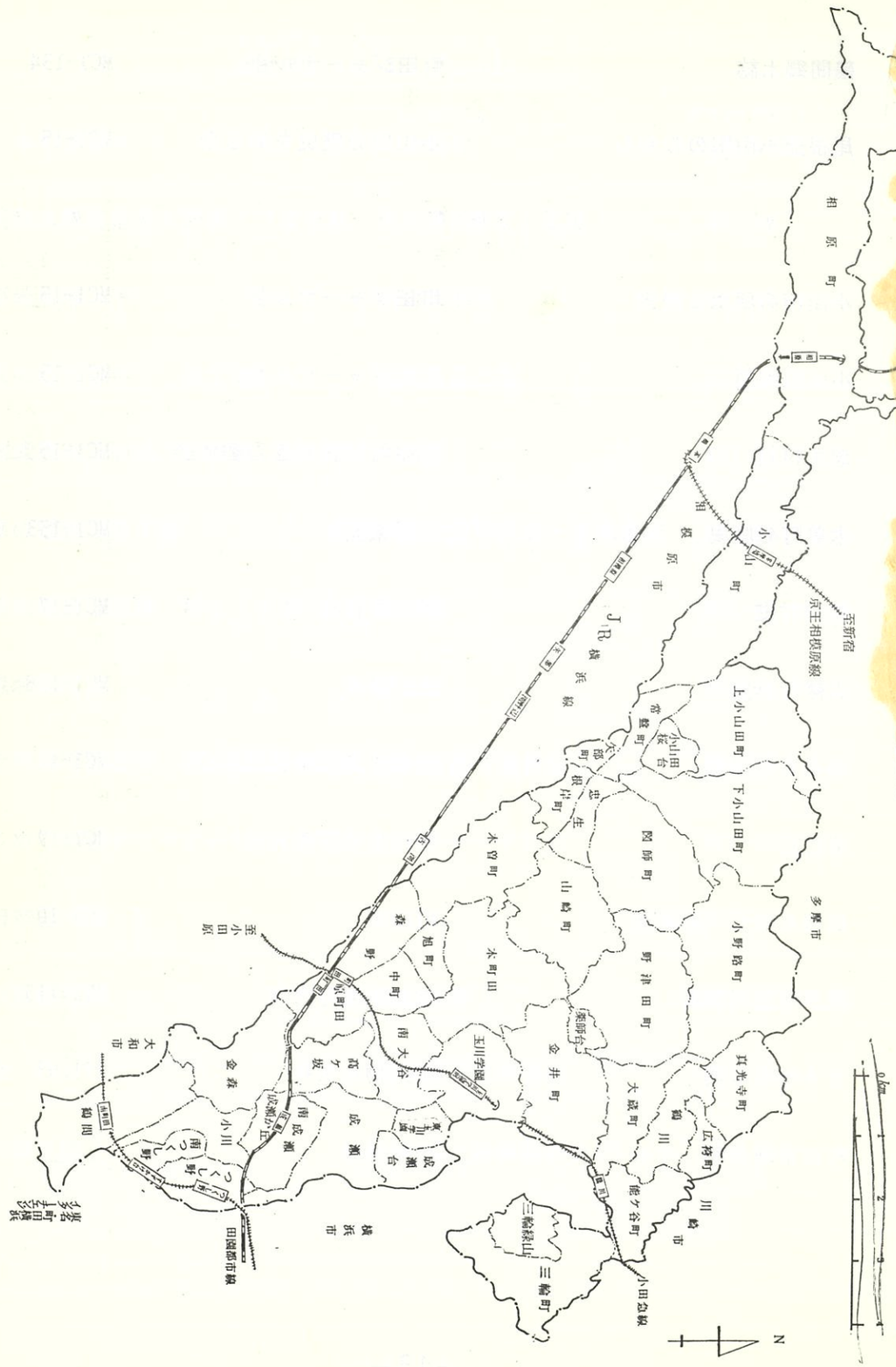
町有谷戸（まちありやと）　町有長谷戸（まちありながやと）　岡田谷戸（おかだやと）　田端（たばた）　田端坂（たばたざか）

荒ケ谷戸（あらがやと）　三ツ目（みつめ）　宝泉寺谷戸（ほうせんじやと）　久保ケ谷戸（くぼがやと）　堂ケ谷戸（どうがやと）

参考にした本

本のなまえ	出版社	分類番号
角川日本歴史地名大辞典１３東京都	角川書店	MD3-00
東京地名考　下	朝日新聞社	MD3-00
東京の地名を歩く　第２巻	日本名著出版	MD3-00
新編武蔵風土記稿三多摩編　第１巻	千秋社	MD1-01
多摩の歴史　第７巻	武蔵野郷土史刊行会・有峰書店	MC1-01
新編武蔵風土記稿　第４・５巻	雄山閣	MD1-04
武蔵名勝図会	慶友社	MD1-04
郷土町田町の歴史　第１・２・３巻	町田町教育委員会	MC1-10
はじめてのわかりやすい町田の歴史	町田ジャーナル社	MC1-10
町田市史　上・下	町田市	MC1-10
絹の道原町田	武相新聞	MC1-115
成瀬	成瀬郷土史研究会	MC1-13
小川郷土誌	小川郷土誌編纂委員会	MC1-131

鶴間郷土誌	町田ジャーナル社	MC1-134
尾根道小山田のむかし	小山田の歴史を知る会	MC1-15
〃　第２・３集	〃	〃
小山田の風土と歴史	町田ジャーナル社	MC1-15
小山田物語	町田ジャーナル社	MC1-15
忠生村誌	忠生村村誌編さん委員会	MC1-15
木曽町の歴史	下村栄安	MC1-153
鶴川村史	鶴川村役場	MC1-17
広袴町小史	吉川泰長	MC1-178
ふるさと三輪	三輪土地区画整理組合	MC1-179
堺村誌	堺村誌編纂委員会	MC1-19
広報まちだ　縮刷版	町田市	MG5-10
我が町玉川学園	玉川学園町内会	MK2-113
日本地名事典	新人物往来社	291.03
町田市地名考　その１	山岸義郎	———



＝ 最 後 に ＝

図書館職員で構成している地域資料研究会は、1991年度（平成３年度）から1992年度（平成４年度）の２年間にわたり研究テーマとして、町田の地名のいわれについて、調査研究をしました。

はじめの頃は、地名のいわれについて、すぐわかると簡単に思っていましたが、なかなか難しくまとめるのに苦労しました。

関係資料を取り寄せたり、町田で生まれ育ったお年寄りの方に聞いたり、発刊するのに１年の予定が結局２年かかってしまいました。

しかし関係各位のご協力により、どうにかパンフレットを発刊することができました。

一読していただき、少しでも参考になれば幸いです。

1993年（平成 5年）３月

町田市立図書館地域資料研究会